

幻の名作「歴年」解禁

シュトックハウゼン、雅楽のため作曲



1977年、東京・国立劇場で初演された「歴年」の杵島隆氏撮影

21日に開幕する現代音楽の祭典「サマーフェスティバル2014」（サントリー芸術財団主催）で、20世紀を代表する作曲家シュトックハウゼン（1928～2007）が雅楽のために書いた「歴年」が上演される。77年、東京・国立劇場で初演。あまりの前衛性ゆえ評論家や学者に葬り去られたが、近年は若い世代から再演を求める声が相次いでいた。「幻の名作」の封印が37年ぶりに解かれる。「歴年」は国立劇場開場10年に向け、日本の伝統文化に傾倒していたシュトックハウゼンに、プロデューサーの木戸敏郎が委嘱した。舞台には1977という四つの数字。雅楽の響きがか

前衛すぎて敬遠…東京で37年ぶり



木戸敏郎

ちこめるなか、4人の舞人が楽譜の指示通りに歩む。シュトックハウゼンが提案したのは、楽器それぞれの音の情報量を視覚化する手法だ。たとえば琵琶や琴の音は、はじいた途端に減衰していく。竜笛は割と簡単に鳴るが、筆（ひし）は強い息の力を要するため長くは鳴らせない。そんな音の持続のあり方で楽器を四つのグループに分け、舞台上の四つの数字に配置した。「歴年」はしかし、音楽界にスキャンダルを巻き起こした。著名な音楽評論家たちから「不毛」「退廃」と断じられ、「二度と上演するべからず」と烙印を押



されたのだ。「伝統」の御紋を傷つける音楽は許さないうという論調に押され、再演の道は閉ざされた。その一方、「歴年」は作者自身に大きな転機をもたらした。七つの曜日を基調とする29時間のオペラ「リヒト（光）」創作の源となったのだ。「リヒト」は欧州各地で様々な演出を伴って上演され、多彩な花を咲かせた。そして05年の

1993年に独ライプチヒで上演された「リヒト」。地球を模した装置やダンサーの動きを加え、新しいスペクタクルへと生まれ変わらせた
©シュトックハウゼン財団

「東京の夏」音楽祭で、日本でも「リヒト」の一部がついに演奏され、若い観客の熱烈なスタンディングオベーションを受けた。

今回のフェスの総合プロデューサーを務める木戸はこう語る。「時代に応じて形を変え、核となる精神を継ぎ、新たな創造の種となる。そうした伝統のあるべき姿を『歴年』が37年かけ、私に教えてくれた」

「歴年」雅楽版は28日午後7時。「リヒト」の一部となった「歴年」（洋楽版）は30日午後6時。演出は木戸と佐藤信。財団（03・3582・1355）。

（編集委員・吉田純子）